

調査・研修等計画届出書

令和 元年 10月 23日

瀬戸市議会議長 様

議員名 長江 公夫



政務活動 として、下記のとおり調査・研修等を実施いたします。

記

期 日	令和 元年10月29日から 月 日まで (泊1日) (10/30-31も高知県内で視察あり)	
調査先・研修名	次世代施設園芸団地	
会場名(会場所在地)	高知県高岡郡四万十町本堂 707-58 四万十とまと (株)	
調査・研修の目的 (今回の調査・研修に係る瀬戸市・自己の現状と課題を踏まえて)	<p>園芸が盛んである高知県では、県内最大の4.3haという面積を誇る四万十町次世代団地(次世代施設園芸高知拠点)が2016年に造成された。ここでは環境制御装置が整備され軒高6mという大型ハウスにおいて温度や湿度、二酸化炭素濃度などのハウス内環境がすべて制御・管理されており、最新技術を駆使した施設となっている。</p> <p>これにより、85人にのぼる新規従事者が雇用されるなど地域経済活性化につながっており瀬戸市においてもアグリカルチャー部門の発展は重要施策にひとつになると考え、特産物プロデュースも併せ視察する。</p>	
議長名の依頼	要・ <input checked="" type="checkbox"/> 不要	依頼先(名称)
同行者名	山田治義・富田宗一・小澤勝・西本潤・三木雪実・長江公夫 戸田由久・宮菌伸仁・柴田利勝・高島淳・朝井賢次 11名	

※行程表を添付してください。

調査・研修等報告書

令和 2年 4月 10日

瀬戸市議会議長 様

議員名 長江 公夫



政務活動として、下記のとおり調査・研修等を実施したので報告します。

記

期 日	令和 元年10月29日から 月 日まで (0泊1日)
調査先・研修名	次世代施設園芸団地
会場名 (会場所在地)	高知県高岡郡四万十町本堂 707-58 四万十とまと (株)
調査・研修の目的 (今回の調査・研修に係る瀬戸市・自己の現状と課題を踏まえて)	<p>園芸が盛んである高知県では、県内最大の4.3haという面積を誇る四万十町次世代団地(次世代施設園芸高知拠点)が2016年に造成された。ここでは環境制御装置が整備され軒高6mという大型ハウスにおいて温度や湿度、二酸化炭素濃度などのハウス内環境がすべて制御・管理されており、最新技術を駆使した施設となっている。</p> <p>これにより、85人にのぼる新規従事者が雇用されるなど地域経済活性化につながっており瀬戸市においてもアグリカルチャー部門の発展は重要施策にひとつになると考え、特産物プロデュースも併せ視察する。</p>
調査先の事業の現状・課題 / 研修で学んだこと・キーワード等	
1. 四万十町次世代団地について	
(1) 平成26年度(補正)次世代施設園芸導入加速化支援事業により、平成28年7月より、栽培を開始する。	
(2) 総事業費約27億円、県内最大面積となる敷地面積4.3ha(東京ドーム一個分)に高軒高ハウス三棟、集荷施設二棟を整備している。	
(3) 栽培品目はトマトであり、年間1,651トンの収穫量がある。出荷先は「カゴメ」である。	
(4) オランダ製の最先端の環境制御技術により、ハウス内の温度・湿度・二酸化炭素濃度などがコンピュータにより管理されている。また地元の木質バイオマスエネルギーを活用して、従来の約二倍となる収穫量を得ている。	

(5) 県内の三事業者が、約 85 人を新規に採用している。

2. 現状と課題について

(1) 近隣の森林から木材の供給を受けて、おが粉を製造しエネルギーとして供給されているが当初の地元森林組合は撤退しており、林業をめぐる環境の厳しさの現実があります。森林環境の整備と農場の熱源としての活用を両立させていますが、生産経費という点では今後の課題ではないかと思われました。

(2) トマトの納品先が現在では一社とのことである。これはメリットであるとともにデメリットもあると考えられるのであり、品目の拡大や取引先の開拓等が今後の課題であると思われました。

調査・研修の成果・考察

1. 施設の見学を行う

(1) 施設は最新のテクノロジーにより管理されており、次世代の農業の在り方はこうであるという見本を見たような気がしました。

(2) 施設内の見学時には出荷等の作業は行われておらず、苗木等の手入れ作業が行われていました。ハウスの軒高が 6m もあるため、高所作業車にての作業でしたが、いくら機械化が進んでも人手の必要な産業であることを実感しました。

(3) 比較的若い年齢層の方々が働くのには適したところであり、地元の雇用創出に貢献しているものと思います。

(4) トマト苗も農場の近くのところで栽培しており、また新たな担い手を育てるセンターも隣接しており、この地域がひとつの生産モデルとなっていました。

2. 所感

(1) 産官学の連携はこれからとのことであり、それらの連携がより進めば、トマトに限らず他の品種の生産が進むものと思います。農業が産業として今後も成り立つことを期待したいと思います。

(2) 本市でも、ハウス栽培により野菜を出荷して生計を立てている農家もあり、適正な生産の規模と供給先が確保できれば、事業として成り立つことができるものと思われました。農業のこれからのひとつの在り方を見たような思いがしました。

(3) 農業の未来に懐疑的な意見も多くありますが、バイオテクノロジーや ICT の活用により、まだまだ産業として成り立つように思います。